SHOW-HEYシネマルーム

★★★

ザ・ハリケーン

２０００（平成１２）年7月6日鑑賞

Data

監督：ノーマン・ジュイソン
出演：デンゼル・ワシントン／ヴィセラス・レオン・シャノン

みどころ

えん罪事件の恐ろしさと再審要求運動に見る人間の善意やエネルギー。ちょっと重いが、実話を描いた感動的作品。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

＜現実のプロボクサー「カーター」＞

この映画の主題は、えん罪。

主人公は、あの「マルコムＸ」の俳優で、近時「マーシャル・ロー」や「ボーン・コレクター」など、多数の作品で主演しているデンゼル・ワシントンが演じる、ボクサーのルービン・“ハリケーン”・カーター。１９３７年、ニュージャージー州生まれの、実在の人物だ。

カーターは１１歳の時、白人男性の時計を盗んだ罪で少年院へ送られるが、脱走して軍隊に入る。ドイツに駐留する軍隊の中で、カーターはボクシングにのめりこみ、ヨーロッパでチャンピオンになる。除隊後、アメリカに戻って、プロボクサーになろうとするが、警察に捕まり、再び少年院へ。

刑期を終えたカーターは、１９６１年、プロデビューし、１９９６年に殺人罪の容疑で逮捕、起訴されるまで、４０試合を戦った。

カーターは、１９９６年6月１７日に発生した殺人事件の容疑者として、１０月に逮捕され、殺人罪で起訴された。そして、翌１９６７年5月、陪審員（全員白人）は有罪と判定。死刑は免れたものの、３生涯分の終身刑を宣告され、収監される。

カーターが殺人罪となった有力な証拠は、「銃をもったカーターが殺人現場から逃走するのを見た」という、A証人とB証人の目撃証言だ。しかし、この目撃証人A、Bは、刑事から、自分の罪を免除してもらうことと、１万ドルの報酬を提示され、それとひきかえに偽証したものだった。

カーターは収監後も、自分は無罪だと主張。囚人服を着ることも断固として拒否する。そして、自伝の執筆に集中する。服役から１０年後の１９７４年に出版された「THE　SIXTEENTH　ROUND」は、大きな反響をよび、歌手のボブ・ディランや同じボクサーのモハメッド・アリなどが、再審請求、釈放運動を展開する。そして、再審が決定されたものの、１９７６年の再審では、再度、有罪判決となってしまった。

「真実」や「人間の善意」を信じて、１人戦ってきたカーターは失望（絶望）し、これまで自分を支え、釈放運動を続けてきた妻へも、自ら離婚を通告。社会との接触をすべて断ち切ろうとする。

＜えん罪事件の恐ろしさと人間の善意ー希望＞

ここで登場するのが、少年レズラ（ヴィセラス・レオン・シャノン）。古本市で、カーターの「THE　SIXTEENTH　ROUND」を２５セントで買ったレズラは、自分の生い立ちと、１１歳から少年院で暮らしたカーターの生い立ちに共通点を発見し、またその境遇の中で懸命に生きてきたカーターに心酔する。そして、自分の率直な気持ちを手紙に託して、獄中のカーターに送る。世間との接触を一切断ち切ろうとしていたカーターも、この、純真にカーターのことを思い、無実のカーターを救いたいと願うレズラの気持ちを知って、少しずつ「希望」の気持ちが湧いてきた。

レズラの保護者となっていたカナダ人のテリー（ジョン・ハンナ）、リサ（デボラ・カーラ・アンガー）、サム（リーヴ・シュレイバー）の３人組は、レズラの真剣な気持ちを理解し、自分たちもカーターの再審、釈放運動に取り組み始めた。刑務所を訪れたリサは、「あなたが釈放されるまでは、国に帰らない」とまで言い切り、再審のための証拠集めに奔走する。えん罪を立証する資料は、十分に集められた。そして遂に、１９８５年１１月、再審の有罪判決は覆された。そして、１９８８年２月には、ニュージャージー州の控訴も退けられ、最終的に１９６６年の事件発生から２２年間にわたる、カーターの戦いは終了した。

A、Bの２人の証人の証言だけで、そんなに簡単に有罪が決まるのか・・・。しかも、終身刑という重罪が・・・。刑事による証拠のデッチあげが、なぜ見抜けないのか・・・。再審請求は、なぜそんなに難しいのか・・・。こんなことなら、えん罪はいくらでも発生するのではないか・・・。このような疑問が、次々と湧いてくるはずだ。

この映画はカーターの超人的な精神力と、その再審、釈放のために献身的な運動を展開した、レズラ少年と３人のカナダ人のチームの姿を描く。そしてそれによって、ルービン・“ハリケーン”・カーター事件はえん罪であったことが判明し、カーターは釈放されたが、これと同種の事件はいくつも闇に埋もれているのではないだろうか・・・。そう思わずにはいられない。そして、そのことは、あらためて刑事裁判の難しさを考えさせる。

ボブ・ディランが歌う「ハリケーン」は、この映画の主人公カーターを歌ったものだということは、映画を観てはじめて知った。人間が人間を裁くことの難しさ、刑事訴訟手続のあるべき姿、などを考えさせられるとともに、やはり、最後は人間の努力や気持ちの持ち方が、状況を切り開いていくのだという、当たり前のことを感動的に再認識させてくれる作品だ。

重くてしんどい、えん罪というテーマだが、俳優デンゼル・ワシントンが、この「ＴＨＥ　ＳＩＸＴＥＥＮＴＨ　ＲＯＵＮＤ」にほれてカーター役を切望した、という話も、なるほど、とうなずけるほど、デンゼル・ワシントンの熱演はすばらしい。必見の一級品だ。

２００１（平成１３）年１０月記